

# パパと魔王

あじぽんぽん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

戻ってきた男とその娘のお話

カクヨムでも投稿してます

# 目次

その 2	その 1
9	1



## その1

「父上よ、我は前世での記憶を全て取り戻したぞ!!」

日曜日の早朝、平凡な田舎町の、平凡な一戸建ての住宅。

一家の長である田中イチローはりビングでソファーに座り、キッチンで朝食の準備をする妻の大きいお尻を眺めていた。

すると来年から小学校にあがる娘が、テテツとイチローの元に駆け寄ってきた。

小さい頃から体が弱く、昨夜も少しだけ熱が出て心配していたが思いのほか元気そう  
だ。

少々変わり者の娘で、どちらかというとな大人しい子にしては珍しく活発だと思いが  
ら、イチローが朝の挨拶をしてみれば先程の発言である。

「ふははははっ！ 我の完全復活に慄き震えるがよい！」

「う、うん？ どうしたんだいマオちゃん？」

「我は田中マオにあらず!! これからこの世界を支配する魔王マオであるぞっ!!」

彼の娘である田中マオは、短い両手を広げて高らかにカッコ可愛い魔王宣言。



一年前と変わらず……いや、それ以上に美しく成長し、優しく接してくれる彼女にイチローはドキドキムラムラ……純粋な恋心が抑えきれなくなった。

そこで彼は、異世界美少女たちとのギャルゲーじみた交流の経験を活かし、スマートに（イチロー視点では）告白を試みた。

『ほらいち君、鼻水を拭いて？ 格好いい顔が台無しだよ？ もう、いち君って私がいないと本当に駄目よね。ふふ、いいですよ、嫌って言っても私が一生面倒をみてあげるんだから』

キリ姉つと泣きながら抱きついて、一年前より大幅に増量した豊かな胸で存分にバブみった。

その年のクリスマスにイチローはキリエから大切なプレゼントをもらつ……おつとと、これ以上聞くのは野暮つてもんですぜ？

それからイチローはキリエと同じ大学にはいり、就職して安定した生活基盤を築き、彼女に結婚を申し込んで、結婚して女の子と男の子の二人の子供を授かったのだ。

——回想終了

「さあ、どうする父上！ いや……勇者イチローよ!! すでに我が配下は召喚済みだぞ





親バカであるイチローは、その姿をスマホで激写したくなった。

「そ、それを分かった上で今まで育ててくれたのか……?」

「前世はどうあれ、マオちゃんはパパとママの可愛い娘だからね」

前世の魔王(♂)は三メートルを越える可愛げのない筋肉お化けだったが。

ともあれ、マオは憑依などではなく魔王の魂を持つだけの完全な生まれ変わりである。

それはイチローの親戚の霊能力者によって確認済みだ。

もちろんイチローにだって思うことや葛藤はあった……しかし初めて生まれればかりのマオに会ったとき、絶対に俺が守ってやると心に誓ったのだ。

今の彼にとってマオは掛け替えのない我が子である。

「それで、マオちゃんはパパを倒して世界征服するのかな?」

「え……?」

「だって、パパはこれでも元勇者だから、マオちゃんが世界征服を始めるなら止めなくちゃいけないよね? でもパパにとってマオちゃんは目に入れても痛くない大事な娘だから、マオちゃんがどんな悪い子になったとしても手をだすなんて……殺すことなんて絶対できないよ」

「ち、父上!」

イチローは愛娘<sup>マオ</sup>に悲しげに微笑んだ。

「例えこの命が尽きたとしてもだ……マオちゃんはパパを倒して世界征服がしたいのかな？」

マオは泣きそうな顔で首を左右に振った。

「い、嫌だ！　ち、父上を倒すなんて我にはできぬ、できぬぞ！！　死なないで父上っ!？」

「それじゃ、マオちゃんは世界征服はしない？」

「しない！　我は世界征服なんて絶対しない!!」

「そうか、マオちゃんは良い子だね、本当にパパの自慢の娘だよ」

「ち、父上——!!」

イチローは泣きながら抱きついてきたマオを優しく受け止めた。

「イチローさん、マオちゃん、ご飯ですよ。あ、あら、マオちゃんどうしたの？」

「ん、まあ、ちよつとね」

キリエがキョトンとした顔で抱き合う二人を見た。

イチローは苦笑しながら、マオを片手で軽々と抱きあげてキリエに渡す。

「びえくん、母上え!!」

「うん？　どうしたのかなマオちゃん？　なにか悲しいことがあったのかな？」

「違う、違うのだ……我は……我は父上の愛が嬉しくて泣いているのだ!!」

「そかそか、ママもマオちゃんのことを大好きですよ」

マオはキリエの豊かな胸に抱きつくと、また泣きだしてしまふ。

キリエは、ちゅちゅとキスの雨を降らしながら、おーよしよしとマオをあやして慰める。

「キリエさん、ボクはユウ君を起こしてくるからマオちゃんのことにはよろしくね」

「はいはい、イチローさん、後で詳しく聞かせてくださいね？」

キリエはイチローに信頼の笑みを見せると、頬にちゅつとキスをしてくれた。

彼女はマオを重たそうに抱いたまま、えほっえほつとキツチンに歩いていく。

流石は二児の母、華奢そうにみえて実にパワフルだ。

イチローは二人の背中を見送り、それから窓の外をソツとうかがう。

先ほど見えた恐竜のような巨大な爪と足は跡形もなく消えていた。

「ふう……危なかったよ……」

イチローは額の汗を拭くと、隠すように握っていた聖剣を異次元倉庫に戻した。

朝っぱらから化け物退治なんて生臭いことはしたくなかったので、マオが物わかりの良い優しい子に育ってくれて助かったと、元勇者のイチローは深いため息をついたのだ。

その日の早朝、田中一家が住む田舎町に巨大な黒い怪獣の姿を見たという者が続出したが、証拠となる写真を撮れた者が誰一人としておらず、都市伝説として囁かれるのみであった。

## その2

「父上……わ、我は犬を飼いたいのだが……」

日曜日の早朝、平凡な田舎町の、平凡な一戸建ての住宅。

一家の長である田中イチローはリビングでソファーに座り、キッチンで朝食の準備をする妻の大きいお尻を眺めていた。

すると小学校一年生になったばかりの娘が、背中になにかを隠し持って歩いてきた。それを不思議に思いながらも、イチローは手にしていた新聞を折りたたみマオに挨拶をする。

「おはようマオちゃん」

「お、おはようなのだ父上」

マオは、もじもじした上目つかいで挨拶。

その様子にイチローは、ははんと察した。

「マオちゃん、捨て犬でも拾ってきたのかな？」

「よ、よくわかったな父上？」

すぐ気づいたのは彼自身も幼い頃、そのような経験があつたからだ。

「道端で震えていて可哀想だったから連れてきたのだ！」

「で、そのワンコを飼いたいと？ うくん、ママには言ったのかな？」

「うむ、母上には報告済みだ！ 父上とユウに許可を貰つて、面倒をみれるなら飼つてもよいと言われた！」

キツチンを見るとキリエがウインクをしていた。

そして腰をふりふりしながら料理に戻る、そんな妻の姿にしばし見惚れるイチロー。

「ふむふむ、じゃあマオちゃん。パパに背中に隠したワンコを見せてくれるかい？」

途端にマオは慌てふためいた。

「なっ！ なぜ、また、わかつたのだ父上!？」

「ははっ、パパはマオちゃんのことなら何でもお見通しなんだよ」

「す、凄い、凄いのだ父上！」

無邪気に喜ぶ娘マオ。

こういうところは母親キリエ似なんだなとイチローは思った。

ただ父親として、こうも単純だと将来悪い虫がつかないかと不安になる。

イチローは義父に、結婚するまで悪い虫あつかいされていたことをすっかりと忘却している。

それはそれとして、可愛い娘からの尊敬の眼差しは彼としては非常に嬉しいものだ。マオのチョロイところは、確実に父親イチロー似だった。

「これなのだ……」

小型犬ほどの大きさの生き物は、クーンクーンと媚びるように鳴いていた。

その仕草は、よほどひねくれている人間でないかぎり愛らしいと思うものだ。

しかし、イチローは……。

「元の場所に返してきなさい!!」

「え、ええ!?!」

きつぱりと拒絶したのだ。

娘に激甘な彼にしては非常に珍しいことである。

だがそれも仕方のないことだ。

イチローが知っている世間一般的なワンコには、角と鱗なんて生えていないのだから。

そのワンコはどう見ても小型のドラゴンだった。

漆黒の魔竜ディアブロ。

かつてイチローが戦った魔王城を守る魔物だ。

元は魔王が拾った捨て竜であったが、途中で飽きた魔王に代わりに、配下の邪神司祭が育てあげた魔王軍屈指の戦闘力を持つ恐るべき邪竜である。

体こそ小さくなっているが、このワンコはその魔竜であった。

「うちには、そんな変な生き物を飼う余裕はありません!」

「ア、アブーは変な生き物じゃないのだっ!? れっきとしたワンコさんなのだっ!!」

説得しようと大慌てなマオに、そんなワンコさんいないよと、イチローは突っ込みかけた。

しかもディアブロだからアブーか?

普通、そこはディアじゃないの?

マオの少し個性的なセンスは、やはりキリエ似である。

確かな血のつながりに、イチローは場違いな感動を覚えた。

「とにかくマオちゃん。うちではそのワンコさん? 飼えないから諦めなさい」

「ええっ?」

「そうだマオちゃん、そんなにワンコさんが欲しいならペットシヨップにいこう。マオちゃんも気に入る、ちゃんとしたワンコさんがきつといるはずだから」

有耶無耶にしようとするイチローの言葉に、マオはぶるぶると震えだした。

腕からワンコさん……ではなく魔竜を取り落とす。



魔竜は、ワンコさんのようにキャンと鳴いた。

「ち、父上は何も分かってないのだ！ バカー!!」

マオは泣きながらキリエの元に走って行った。

罵倒されたイチローは酷い衝撃を受けた。

マ、マオちゃんに嫌われた……だどっ!?

それはイチローにとって、異世界での戦いの日々より辛いことだ。

何とか再起動してキツチンを見ると、キリエがマオを抱きあげて慰めているところだった。

彼女はイチローの視線に気がつく、困ったように微笑みながら僅かに口をとがらせた。

キリエのそれは、イチローにはお馴染みの「メツでしょう、イチ君」であった。

「……………」

三十路に入っているキリエのメツは、その母性と共に破壊力を増していた。

惚れ直したイチローは、キリエに拝むポーズをすると問題を解決することにした。

案件は、ワンコさんのように後ろ足でお座りしてやがる偽ワンコさんである。

「くっ……!？」

爬虫類くせに正直あざと可愛かった。

何となく見つめあう、元勇者と魔竜。

「あー、魔竜は困るんで、帰ってもらえるかな？」

口にだしてから、爬虫類になんて言ってるんだと、イチローは自分のアホさ加減が嫌になった。

「申し訳ありません。そうしようにも、自分、どうにも不器用なもので……」

沈黙。

イチローは少しだけ思索し、そして驚いた。

「え、喋れたん!？」

「はい。この世界に来てから覚ええました」

捻りもなにもない問い掛けに、ワンコ……ではなく魔竜は頭を下げながら答えたのだ。

「あー、うん、そうね、そりゃ大変だよね」

「はい、その通りで」

イチローの事情聴取に、律儀に一つ一つ返答する魔竜ディアブロ。

以前、魔王城で会ったときは、いかにも恐竜といった感じで話せるとは思わなかった。ところが実際には、下手な人間より理性的で紳士的な性格をしていらっしやる。

しかも三日で日本語を覚えたらしい……人間さまよりスペックが高いだど!?

「で、マオちゃんのお召喚にに応じてこちらの世界に来て、戻れなくなつたと……?」

「はい、恥かしながら……」

恥ずかしげに答える魔竜。

戻れないというのは本当のことらしい。

「それに戻れたとしても、魔王さま……いえ、マオお嬢さまのことが心配だったもので……」

この爬虫類、忠義の臣であつた。

忠犬、いや忠竜か?

「あーでも、うちのマオは家来とか間に合つていふか、魔王とか廃業しているの  
で」

「それも存じております。それに今のお嬢さまは魔王さまのような暴君とはほど遠い、  
とても健やかで真つすぐに育つていふと思えます」

「そ、そうか? そう見えるか?」

「はい。これもひとえに父君であるイチローさまと、母君であるキリエさまのしつかり  
とした教育の賜物であると、一匹の元家臣として感謝の念に堪えません」

「お、おう」

なぜか爬虫類に褒め称えられている田中家夫婦。

子育てという当然のことをしているだけだが、イチローは照れ臭くなつた。

「とはいえ、イチローさまたちにご迷惑をお掛けるわけにはまありません。自分はこのまま姿を消し、影からマオお嬢さまを見ていきたいと思ひます」

「ええつと……でも、あの世界には戻れないんだよな？」

「はい、そうですが、騒ぎなどを起こすつもりはないのでご安心ください。それにこの身だけなら隠れ住むなど容易いこと。ですのでイチローさま、どうかこのディアブロに、マオお嬢さまの成長を見守る許可を与えて頂けないでしょうか？」

伏せ、ではなく、ぺこりと頭を下げる魔竜。

なんてできた……魔竜だよ。

イチローは自分が悪者になつたようで居心地が悪くなつてきた。

この子、よく躰けられているみたいだし、うちで飼つてもいいんじゃないしら……いやいや、なに言つてるのこいつは魔竜だぞ。

そのようにイチローが、でもでもだってと悩んでいると。

「お願いしますイチローさま。せめてマオお嬢さまが大人になるまで……それまで、悪い虫がつかないように自分に守らせて欲しいのです」

「よし、君を飼おうー」

この男、即決である。

敵には鬼のように容赦ないイチローも、仲間にはとても寛大であった。

「え、よ、よろしいので?」

「うん、君は我が家のペット兼、虫除けボディガードとして飼うことに決めたから……ああつと、できるだけ普通の人の前では喋らないようしてもらえるかな?」

「は、はい、それはもちろんです」

「それで、食事は多分カリカリになると思うけど、それもいいかな?」

「はっ? カリカリ……でございますか?」

「うん、カリカリさんだ(猫大好きなアレ)」

魔竜は意味が分からず、チワワのように大きい瞳を白黒とさせた。

イチローは不安げにこちらを覗っていたマオを呼んだ。

「いいかなマオちゃん。この子はぬいぐるみではなく生き物だからね? ちゃんと面倒をみるんだよ」

「ち、父上、飼ってよいのか!? 大好きなのだっ!!」

「ふふ、良かったわねマオちゃん」

大喜びして、きゅーと抱きついてきたマオと微笑むキリエ。

イチローはもちろん悪い気はしなかった。

こうして田中家に家族増えた。  
ただこの魔竜、マオより弟のユウの面倒をみるはめになるのだが、それはまた別の話である。